

## アスペルガー症候群と感覚過敏（2）

生島博之（愛知教育大学 教育臨床総合センター 教育臨床分野）

### 1. はじめに

特別支援教育が必要とされる子どもたちの中に、アスペルガー症候群の子どもたちがかなりのウェイトをしめていると思われる。そして、アスペルガー症候群の子どもたちへの特別支援教育の実践においては、三つ組み（社会性の障害、コミュニケーションの障害、想像性の障害）の特徴をしっかりと理解した上での具体的な工夫が必要になる。しかし、その前提として、アスペルガー症候群の子どもたちの感覚過敏を理解し、教育環境を整えることも重要であると思われる。そこで、今回は、味覚過敏や聴覚過敏について考えてみることにしたい。

### 2. 味覚過敏、臭い、食感、見かけ

アスペルガー症候群の子どもたちには偏食がみられることが多いが、その背景には、見かけ、味覚過敏、食感、臭い、字義どおりの受け取り方、等が影響していることが多いと思われる。

藤家寛子(2007)は、見かけ（形、色、など）について、“私は「形が気持ち悪い」とか、「色が気持ち悪い」せいで、まったく食べられないものがたくさんあった。スイカなんて、今でも見るのがいやだ。外見だけでも怪しいのに、割ったら赤なのだ。定型発達の人は、いちいちひっかからないのだろうが、自閉っ子の私は違った。緑を割ったら赤がでる。どういふ色彩感覚なのか？ 趣味が悪すぎる！ メロンも気味が悪かった。あの、アミアミシ

ているところを凝視するたびに、具合が悪くなっていて”“小さい頃、近所に魚屋さんがあって、私は母の買出しについていったことがある。なんで魚は横を向いているんだろう。不思議だったし、正面を向かない魚が、私には生意気に見えた。そこで、手にとって顔を正面から見たら、目の焦点が合わなくなり、それ以来、魚嫌いになってしまったのだ”等と述べている。また、自分の味覚過敏について、“一回、お米が不作でタイ米が出回った年がありましたよね。「長さが違う」と思って食べられませんでした”“食べたことのないものは恐いです。色とか形とか、味以前の部分で、見るだけで気持ち悪かったり恐かったりして食べられないものも多いです。一度、講演に養護学校の先生がいらっしやっていたことがあるんですが、自閉症の子どもが食べ物を見て「こわい、こわい」と言うので、「食べたくない」と言うんだよ、と教えていたのですが、本当に怖がっていたとは初めて知りましたっていう感想をいただきました”と補足したり、字義どおりの受け取り方について、“トンカツという以上は、まずトンカツを食べなくては、と思います。（キャベツは）いつ食べるのかわかりませんね。トンカツを食べるときには、まずトンカツから食べなくちゃいけないような気がします。そうするとそれだけでお腹がいっぱいになるから、キャベツまでたどりつけないんです”“浅見さんに「ご飯食べに行こうって言われたんですけど、いつ食べに行くか訊いた方がいいんでしょうか」って訊いたんですよ。そしたら、「ご飯食べに行こう」っていうのは「今度楽しい時間を持とうね」という意思表示であって、

必ずしもご飯は食べないかもしれないし、食べに行っても米粒じゃないこともあるって教わりました。そうか、仲良くしようねの代わりに「ご飯食べに行こうね」って言うんだ、ってわかりました”等と述べている。

一方、ニキ・リンコ(2004)は、「ご飯食べに行こう」と言われることに対して、“最初の頃、「おかずは食べないのかな」って思っていました”“嘔みすぎてリキッド状になってしまうと、気をつけないと入れるところ間違えて気管に入ったりしそうで。適度な塊の方が安心なんです”“嘔むふりはした方がいいみたいです。怖いから嘔まないのとは別に、単にひどくお腹がすいているからって理由でがつくこともありますよね。そんなとき、空気をいっしょにのみ込んでしまうんです。胃がばんばんにふくれ上がってひどく痛みます”“実際には、食べ物や飲み物の誤嚥はそんなに多くなくて、むしろ何もしてないとき、特に眠っているときのヨダレの方が多いんですけどね。夜中にヨダレでむせて目がさめるときって、寝ぼけてるせいもあるんでしょうけど、すごく怖くて。それに、あとになって熱が出ることもあるんです”“いつ食事していいかわからないという問題もある。時間という観念がつかみにくい”等と述べている。

また、バロン&バロン(1992)は、自分の味覚や食感について、“私は食べ物の食感に対してひどく過敏で、どんな食べ物でも、感触を確認するため指で触れてみてからでないと、口に入れることができませんでした。麺と野菜が混ざっているとか、パンに中身を挟んでサンドイッチにするといったように、食べ物を混ぜることが大嫌いでした。私はそうした食べ物を口に入れることは決して、本当になかったのです。もし、そんなことをしたら、猛烈に気分が悪くなるのが分かっていました”等と述べている。

一方、奥平綾子(2006)は、息子のダダくんの味覚について、“息子もそうですが、自閉

症の人は偏食が多いとよくいわれます。それは、ある食べ物は砂みたいに感じたり、ねばねばをきつく感じるように、口の中の触覚過敏があるからです。食べ物によっては、見た目の違和感で食べられないこともあります。白いものが食べられないため白いご飯が苦手だったり、人によっては、色がついた味付けご飯は、ご飯とは違うものに思えて、手が出ないこともあります。素材は同じジャガイモでも、フライドポテトはOKなのに、ポテトサラダになるとだめとか、食感の違いだとは思いますが、形状も気になるようです。何の食材でどんな味がするのか、想像がつきにくかったりすると、食べられないこともあります。三角食べのように、あれもこれも混ぜて食べるのは、その時どきで味が変わるから苦手としています。順番に一皿ずつ食べると楽なようです”等と述べている。

また、ケネス・ホール(2001)は、“ぼくが人と違ってのは、ほとんどの食べ物がどうしても食べられないこと。食べることが、ぼくの最大の悩みのひとつ。どうしてこんな悩みがあるのか説明できないけど、ぼくにとってそれがアスペルガー症候群の一番やっかいなところだ。何よりいやなのは、新しいものをためしに食べてみる。ぼくが食べるものって、もともとあまりない。とくにいやなのは、つぶつぶの入った食べ物とか、何かまざりあっているもの。たとえばチーズサンドとパンが合わさっている感じとか。色のまじった食べ物もいやだ。ひとりで勝手にさせてもらえれば、少しはましに食べられるときもあるけど。ぼくが好きなのは、ボールに入った、おろしたレッド・レスターチーズ。今、お昼にはこれを毎日食べてる。ママは、たいていぼくにチーズをおろさせてくれる。うちのおろし金にはサイズが三つあって、そのうちひとつがぴったりなんだ。ぼくの好きなように、チーズがとても細かくおろせる”“変な舌ざわりの物は食べたくない。ポテト

チップスのプリングルズは完璧だけど、プリングルズ・ライトはかたすぎるので好きじゃない。ほとんどの食べ物は、ひどい舌ざわりなんだ。たとえばマッシュド・ポテト。水にひたした紙みたい。紙粘土に似た感じで、張り子のようにぼくの口の中の小さなすきまに入りこんじゃうかもしれない。ちょっと変だけど、ぼくは歯をみがいたすぐあとが、食べたり飲んだり食欲が一番わくみたい” “口に入れるものでは、プリングルズの感触が一番好きだ。にぎやかでサクサクしているから。それに、ぼくはストローを使って飲むのが大好き。電動ハブラシが口にあたる感じや、歯医者さんのゴムの手袋の感じも好き” 等と述べている。

そのため、トニー・アトウッド(1999)は、“偏食をなくすために強制的に食べさせたり、空腹を利用するプログラムは、避けることが大切です。子どもは、ある種の食べ物への感受性が高まっているのであって、意図的に反抗しているわけではないのです。単なる行動上の問題とは違います。それでも、親は子どもの食事が偏らないように気をつける必要があります、栄養士の助けを得て、栄養学的に適切で子どもが許容できる範囲の味や食感の食べ物を選ぶと良いでしょう。感受性は徐々に軽減しますが、恐怖心が残っているので、結果として拒否することは継続しがちです。そうになったときは、いきなり新しい食べ物を噛んだり飲み込むよりも、事前になめたり舌の上で味見することを促します。そうして食べられる物を増やしたり、子どもの感覚刺激への反応をテストしてみるわけです。リラックスしたり、ほかのものに気を取られているときに、初めての食べ物を試してみるのも良いでしょう。しかし、全く同じ原材料を同じ方法で調理して食卓に出すように、非常に限定された食習慣が生涯を通して継続するアスペルガー症候群の人もいるのです” 等と、アドバイスしている。

また、味覚に関しては、臭いも関係しているらしく、ルーク・ジャクソン(2005)は、“自閉の人には、味のことで困っている人も多い。ほとんど味つけしてない淡泊な物を好む人もいるし、スパイスたっぷりでも香りもキツイ物が好きって人もいる。どうも、味蕾が発達しすぎている人と、未熟な人とがいるみたいだね” “たしかに自閉症やアスペルガー症候群の子どもたちには、食べられない物が多くて困っている子が多い。でもそれは、かならずしも味が気に入らないとはかぎらない。だって、味がどうこういう以前に、見慣れない物は最初から口にしないって人が多いもの。味だけじゃなくて、見かけ、食感、においも関係してくるし、なにより「いつも同じでなくては」という欲求のせいもあるしね” “小さいときは大変だったけど、いまはそうではない。いまでは、魚屋さんの近くを通るのはまだむりだし、キツイ香水ではクシャミが出るっていう程度。でも、大変なのはママなんだ。鼻のいいこととよければ、警察犬なみでね。いつも、ほかの人にはわからないようなにおいがつらいついてこぼしているよ。どこかのお店に行っても、ママだけが真っ青になってあれがくさい、これがくさいって言うのに、ママ以外の人にはなんのにおいもしなかったりなんてことはしょっちゅうだよ” と述べ、“これを読んでアスペルガー症候群のティーンのみなさんの中にも、幸運にも彼氏や彼女に恵まれている人はいると思うけど、臭覚が人並はずれてするどいと、デートのときに困ることもあるよね。でも、気をつけてね。相手のつけてるオーディコロンのおいがツライからって、いきなり、「げっ、そのにおい、サイテー！」なんて言っちゃダメだよ！さもないとあつという間に「カレシ」は「モトカレ」、「カノジョ」は「モトカノ」になっちゃうからね。それより、自分は鼻が弱くて、コロンがキツイと粘膜がはれてしまうんだとか説明して、次のデートのときにはもう少し

量を控えてくれるよう、お願いしてみるのがいいと思う”等とアドバイスしている。

一方、奥平綾子(2006)は、息子のダダくんの嗅覚について、“嗅覚も敏感で、それも好悪に影響しています。小さいころは、なんでも匂いを嗅いでから、食べ物を口にすることがありました。べつに腐ったものを出しているわけではないので、私たちからすると不可解でしたが、これも、以前食べたものと同じ匂いをしているかどうかの確認だったのでしょう。なじみのあるものが好き、経験しているものは安心する。そのために、自分の手がかりにできる感覚を使うのです。また、私の実家は古い壺や具足などがある骨董屋なのですが、息子はなかなか家の中に入ってくれませんでした。小学校の高学年になって、鼻を押さえて「臭いね」と言ってくれるようになってから、お店の中の匂いに抵抗があることに気がつきました。たしかに「古くさい」。たいていの人は、匂いに慣れていくものですが、息子には、慣れない匂いなのでしょう”等と述べている。

また、リアン・ホリデー・ウイリー(2002)は、“何かことあるたびに、私は結果など考えずに行動した。生物の授業は、学期のまっ最中に放棄してしまう。教授が私の目の前にホルマリン漬けのブタの胎児を置いたそのときを境に、二度と授業に出なかった。激しい臭いに襲われ、とても耐えられなかったのだ。こんな時期にやめたらひどい成績が残ってしまうのに、だからといって順調とはいかなかった。代数の授業も、たまにしか出なかった。理由は、講師の声の質がカンに障るから。やはり、成績のことなど考えていなかった。演劇論の講座はどれも大好きだったのに、だからといって順調とはいかなかった。中の一つは、使われている教室が苦手なために挫折することになる。とにかく暗くてかび臭く、窓一つない、薄気味悪い部屋だった。あんな部屋、若者の集う場所ではない。廃棄処分を待

つ不要品の箱でも積み上げておくにふさわしい—そんな部屋だったのだ”等と、大学時代の苦手な「臭い」について語っている。

一方、トニー・アトウッド(1999)は、ある一つの感覚系が刺激されると、別の感覚系も刺激される現象（共感覚）について、“最も一般的には、特定の音を聞くと、いつも色が見えると表現されます。これは彩色聴と呼ばれることがあります。例えばジムは、ある特定の音が色、形、質感、動き、匂いまたは香りなどのぼんやりとした感覚を伴うことがよくあると言っています。彼はまた、聴覚刺激がほかの感覚処理を妨害することについても言及しました。例えば、「食べ物を味わうためには、台所の器具のスイッチを切らねばならない」といったようなことです”等と述べている。

なお、この共感覚と関連すると思われる「感覚の混線」について、ルーク・ジャクソン(2005)は、“自閉症スペクトラムのどこかに属する人たちの中には、感覚のことでいろいろ苦労している人がけっこう多いんだ。ぼくらのことを、何もわかってないんだろう、鈍感なんだろうって思ってる人もいるみたいだけど、とんでもない誤解だよ！鈍感どころか、正反対さ”“ベンはよく、灯が急に点いたり消えたりしたときに、あわてて耳をふさぐことがある。かと思うと、キツいにおいがするからって、ぎゅっと目をつぶっていることもある。自閉症スペクトラムの人たちって、複数の感覚が混線することがけっこうあるんじゃないかな。ぼくにもそんな経験がある”と述べ、“ある日のこと、ママの発案で、みんなでお出かけすることになった。行き先をどこにしようか、一時間ちかくも言い争ったあげく、ようやく動物園行きが決まった。動物園には、ライオンがいた。いろんな種類のへびもいた。虎がいた。鹿がいて、サルがいて、キツネザルがいて、それにゴリラもいた。ぼくもひとつ残らず見物して回ったよ。気分も

上々、体調だって絶好調だった—ゴリラのコーナーにくるまではね。ところが、ゴリラを一目みたたん、おなじみの「あの感じ」におそわれた。そう、ぼくはゴリラから顔をそむけると、その場で吐いてしまったんだ。どうしてゴリラなんか見てむかむかしたのか、ぼくにはわからない。そのときを境に、なにもかもおかしくなっちゃった。それまでぜんぜん平気だったのに、ほかの動物を見てもちらっと目に入っただけで、たちまち吐いてしまうんだ。ママは、片手でジョーの乗った乳母車を押しながら、もう片手でぼくの目をおおってくれた。ぼくも、動物の姿さえ目に入らなければ、むかむかしたりはしないんだけど、ちらっとでもものぞいちゃうと、そのたびに吐いちゃうんだよね！いま、ベンのようにすを見ていたら、光がまぶしすぎるときに耳をふさいだりしている。それを見てて思ったんだけど。あのときむかむかしたのは、ゴリラのにおいのせいなんじゃないかな。ゴリラのにおいでなにかある一線を越えちゃって、ほかの動物のにおいまで全部ひっくるめて、がまんできなくなったんじゃないかと思うんだ。もちろん、あのとき隠していたのは目で、鼻をつまんだりしてはしなかった。だけど、ぼくもベンと同じように、感覚と感覚が混線していたのかもしれないって思うんだよ”等と、自分の体験を語っている。

また、リアン・ホリデー・ウイリー(2002)は、感覚と感覚の混線によると思われる恐ろしい体験について、“あれはもしかしたら、感覚刺激の負担が限度を越えてしまったのかもしれない。あるいは、次に何が起きるか予測できないせいで、神経がすり減ってしまったのかもしれない。いや、単に、狭い空間で、慣れない人たちのすぐそばにいる感覚が悪かっただけかもしれない。とにかくはっきり言えるのは、あれが恐ろしい体験だったことぐらいいだ。みんなの顔と顔が混ざり合い、人々の声は調子つばずれに聞こえだす。自分の五

感がさっぱり当てにならなくなる。周囲のできごとはスローモーションになり、やがてストップしてしまう。どこか静かな場所、誰もいない部屋を見つけて、自分を立て直すまでは、元には戻らない”等と述べている。

さて、藤家寛子(2007)は、大人になってからの変化について説明し、“私はバナナケーキを頼んだ。もし、巨人の世界の住民のままだったら、ケーキの形だけに反応していただろう。楕円形なものには理由があるのか、とか、ひし形は何かの暗号だ、とか、巨人からのメッセージを読みとろうとしていた。でも、今は違う！ショコラのかぐわしい香りや生クリームの入ったバニラエッセンスの匂いがあるのだ。バナナは甘くて、ケーキはちょっと冷えていて、おいしいのである。目に入る長方形のケーキが立体的に見えるし、口に含んだら味もする。味わうって、舌だけでなく、鼻も使って感じることなのか。生きているって、五感を使うことだったのだと知った私は、ケーキを食べただけで、存在している自分を確信できた”“みんなは、食べながらそれぞれに会話していた。最初は戸惑ったが、なんだか、全員の話聞き取れなくてもいいんだということが分かってきた。音を全部拾ってしまう耳を持っているので、話していることは全部聞き取らなくてはいけないと思っていた。だから、子どものときに聖徳太子の話をきいて、「やるな〜」と感心していた。聖徳太子も、いっぺんにたくさんの音が流れ込んできていたんだろうなと思っていたからだ。だって私の耳は、はじめからそんな音しか聴いたことがない。だから、聞き取れない自分は、ヘタレなんだと勘違いしていたのだ。近くにいる人と話せばいいんだ。二十六年生きてきて、初めて気がついた。私は楽しくおしゃべりをして、サラダやマッシュポテトを味わえた”“朝起きてめずらしくお腹がなった。起きてすぐにそう感じるのは、めずらしいことだった。今だったら、お腹が鳴ったときに、

空腹と気づくことができるが、以前はわからなかった。胃の内側が軽く引っ張られる感覚を、お腹が減ったと呼ぶと知ったのは、浅見さんに出会ってからだ。自閉のことを知らなかった母に言っても、「胃がいたいなら薬を飲んでおきなさい」と返ってくるだけ。同じことを浅見さんに言うと、「お腹がすいたということでは？」と答えてくれたのだ。そういわれてみると、きゅるっとなったときに、ラスクを食べるとものすごくおいしい。鍊り菓子と抹茶を飲んだときも、幸せな感じがする。そうなったときに主食を食べればいいのだ！ラスクとかプリンじゃなく、おかゆと卵焼き食べた方が、体にはいいはず。食事が苦にならなくなったので、今度は何を食べたらよいかを、自分で探っているときだった”

“本当は食欲なんて本能に入るのに、私にはその欲がなかった。だから、「食べたい」と思うことからはじめなくてはいけなかったのだ”“私には本能に欠けている部分があった。人間をつかさどっている欲は、食欲、性欲、睡眠欲だ。私には食欲はないに等しかった。食べる気がしない。食べない。お腹が減っているってどういう状態？ぐーって鳴ったら、食べなきゃいけないの？牛肉を食べたら、消化できなかった。夕飯にお肉が出ると、お風呂に入る頃には、顎が動かなくなって、疲れながら体を洗っていた”等と述べている。

また、藤家寛子は、ニキ・リンコ(2004)との対談の中で、“脳が酸欠起しそうなほど気持ち悪かったです。本当に申し訳なく思っています。母は祖母にも怒られたみたいですから”“最近、本当に母に悪かったな、と思って『今さらごめんね2004・夏』っていうエッセイを連作で書いているのです。お母さんがいやだったんじゃないんだよ、こういう風な理由で泣いたんだよ、っていうことをまとめていっているんです。それで、なんで食べられなかったのか、とか、今になって説明しています”等と、補足している。

### 3. 聴覚過敏

アスペルガー症候群の子どもたちには、大きな音やざわざわした音、等が苦手なことが多いが、その背景には聴覚過敏が影響していることが多いと思われる。

ルーク・ジャクソン(2005)は、“いまのわが家では、聴覚のことでいちばん困っているのはベン、それに、おかしな話だけどママなんだ。ママは、映画だとか、その手のものが大の苦手。音が大きすぎるんだね。みんな映画館なんかに行っても、ママはずっと耳栓をしているか、指で耳をふさいでいる。なにかがぶつかるシーンなんかあった日にゃ、空に届くかっけくらい飛び上がる。ママの耳って超能力者並によく聞こえるんだ。自分の部屋にいても、家の反対側の部屋でだれかがひそひそ話をするのがはつきり聞こえちゃうくらいさ”“ベンは、映画館なんてむり。耳だけじゃなく、あらゆる感覚がいつぺんに痛めつけられることになるからね。いつぺんだけためしに連れてって見たことがあるんだけど、ベンはゆかに倒れこんで、両耳・両目を手でしっかりふさいでいるのに、それでもまだ「うるさすぎ」「くらくならない」って叫ぶもんだから、連れて帰るしかなかった”“ぼくも前はいろんな音が苦手だったけど、いまは楽になった。いまでもどうしてもダメなのは、室内プールとか、広いホールなんかのくぐもったざわめき。あと、すごく困ってるのは、試験のときに、大きな講堂で受けなきゃいけないこと。部屋中の全員が問題用紙をめくるたび、ぼくには全部聞こえちゃう。ほんとおかしくなりそうだよ”“アスペルガー症候群の人たちには、安心感を与えてくれるものを見つけようと、自分なりにあれこれ工夫している人が多い。ときには安心どころか、外の世界をしめ出そうとすることもある。小さいころのぼくは、昔の空軍の戦闘機乗りが

かぶるみたいなバラクラヴァー帽をかぶってたけど、あれをかぶるととても安心できたんだ。そのころは、一日に二四時間、週に七日かぶってたね。学校の授業中にも、食事どきにも、どこでもかぶってた。学校の同級生なんて、ぼくの顔を見たことのある子はいなかったんじゃないかな？それにしても、あのバラクラヴァー帽、洗濯はいったいどうしてたんだろう？あのバラクラヴァー帽がそこまで好きだったのは、単に、気持ちがいいからってだけじゃない。ちゃんと実用性もあったんだ。まず、耳を守ってくれる。毎日毎日、一日じゅういろんな騒音が入ってくるのが、少しは軽くなる。ほくは聴覚がとても敏感だから、この世界はすごくやかましく感じられるんだよ。バラクラヴァー帽を通すと、その音がほんのちょっとだけやわらかくなってね、物音の聞こえ方が変わるんだ”等と述べている。

また、奥平綾子(2006)は、息子のダダくんの聴覚について、“たとえば、突然鳴る大きな音を極端に怖がったり、たくさん音が一度に重なったように聞こえたりすることがあります。また、私たちが気にならないような周波数を拾ってしまうこともあり、空調のブォーンというかすかな音も耳についてしまい、慣れるまでは、しんどかったりします。息子は、スーパーなどのにぎやかな場所に行くときは、タオルをかぶっています。クラスのみんなのおしゃべりに、耳を押さえるときもあります。それは、たくさん音がいっぺんに入ってきてうるさいからです。人間には、自分が求めている音を聞き分ける機能がありますが、息子は、その機能が働きにくいのです。そのかわりに絶対音感を持っていて、テレビやCDの音楽はOKでも、隣で人が歌うのをいやがります。私も、よく口を塞がれました。とっても音痴に聞こえるのでしょう”等と述べている。

泉流星(2005)は、アスペルガー症候群の妻

について、“異星人妻は、聴覚もやけに敏感だ。うちの近所には、なぜか毎朝六時過ぎに掃除機をかけるのを日課にしている家がある。僕にとっては、ああ、掃除機だなんてわかる程度の音でしかないんだけど、妻にとってはこれが結構こたえるらしく、毎朝、「うーっ！」とうめいては、ため息をついている。さすが、赤ん坊のころから掃除機のガーガー・キーンという音が苦手で、苦痛のあまり、まだ歩けない頃からハイハイで家中逃げ回っていたというだけのことはある。当然、今の我が家で掃除機を使うのは僕だけで、妻はその間、頭から布団をかぶってひたすら耐えている。他にも、よその家の電話の内容から、明日の遠足のお弁当を何にするかで親子が口ゲンカしている内容まで、妻の耳にはとにかくいろんな生活音が嫌でも入ってきてしまう。妻の耳は、まるで感度の良すぎる集音マイクみたいで、どうでもいいような雑音から何から、とにかくあらゆる音を拾い上げ、しかも、それが意識にまで入りこんでくるのを自分ではコントロールできない。近所で内装工事なんかがあった日にはもう大変で、トンカンという音が一日中頭の中で響き続け、「も一何も考えられなくて、ホント参ったよ〜」なんて、よくこぼしている。そんなの、わざわざ聞き耳をたてなきゃいいのにも思いうかもしれない。でも異星人妻の場合、周囲の音を自分の都合にあわせて選りわけ、聞きたい音だけ拾って、いらぬ音は聞き流すってことができないんだ。そもそも、聞き流すっていうのがどういうことなのか、妻にはよくわかっていない”“ところで、妻の妙に鋭い聴覚も家の中でならまだそんなに問題にはならない。ただし、一歩外にでると話は別だ。買い物しにスーパーに行っただけで、ざわざわと入り混ざった雑多な種類の音があらゆる方向から押し寄せてくる。行きつけの場所ならある程度なれているけれど、妻の場合、店内放送が一番苦手だ。特に絶え間なくかかっ

ているBGMがどうしても気になるんだそう  
で、耳に入ってくる音楽をどうしても意識か  
らふり払えず、しかもなぜか、いちいち題名  
を頭の中で確認せずにいられないんだとい  
う。知ってる曲なのにタイトルが思い出せな  
かったりすると、そのことが妙〜に気になっ  
て、その後いつまでも、ずっとそのことを考  
え続けてしまったりするんだって”等と述べ、  
“地球人だって不安でびくびくしているとき  
はいつもより感覚が過敏になるし、それはす  
ごく自然な反応だと思うからだ。たとえば、  
お化け屋敷が怖いのは何より、暗くて周囲の  
状況がまるでわからないっていう、あの状況  
があるからだろう？お化け屋敷では、ちょっ  
と怪しい物音がしたり、冷たい風が吹いてき  
たりしただけで、みんなが怖がって悲鳴をあ  
げる。これって、異星人の感覚過敏と似てい  
ないだろうか”等とコメントしている。

また、ケネス・ホール(2001)は、“ぼくは、  
おだやかな音が一番好き。たとえば小鳥のさ  
えずり。絶対にいやなのは、掃除機とミキサ  
ー、それとたくさんのしゃべり声。掃除機が  
かかっていると、いつもすぐにその場をはな  
れちゃう。掃除機でパニックになる理由は、  
小さいころまでさかのぼると思う。ママが掃  
除機で、ぼくのおもちゃとか何か大切なもの  
を吸いこむんじゃないかと、心配だった。そ  
うして、そのパニック感が広がって、ミキサ  
ーの音にもうつったんだ”等と述べている。

藤家寛子(2007)は、“私はフリーズするこ  
とが多かった。音や光の不快刺激から身を守  
るためのグッズは持っているが、それを使う  
前にフリーズすることもよくあった”“耳を  
守るためのニット帽をかぶり、綿の肌触りの  
よい服装で、ウォークマンを聴きながら、ト  
ンボ眼鏡のようなサングラスをかけて歩いて  
いると、お年寄りには振り返って見るのだ。フ  
リーズを防ぐためには、この格好が一番いい。  
事情を知らない近所の人から見ると、きつと  
変だと感じるだろう”等と述べている。そし

て、具体的な体験(築八十年のわが家の改築)  
について、“玄関を出るとすぐ道路、という  
ことで、改造車や暴走族の集団が通ると、家  
が揺れる。大きな音が怖い私のために、父は、  
防音ガラスを入れようと提案してくれた。雨  
戸が復活したら、風や雨の音に悩まされずに  
すむと、母はなぐさめてくれた。確かに私に  
とってはいいことだ。年度末に私の部屋の真  
裏ではいきなり道路工事が始まり、すごく狭  
い範囲をコンクリート固めにされた。地盤沈  
下で部屋が傾き、ドアも閉まらなくなってい  
た。家の工事をすれば、そこも直してもらえ  
る。しかし、私は、工事を企てている両親の  
ことを腹立たしく思い、しばらくは口を利か  
なくなってしまう。工事すると、家の外観  
が変わるし、室内がどうなるのかイメージで  
きないのが理由だ。それから、足場を組み立  
てるときの金属音も、工事の音も、寝込んで  
いた私の体に、ダメージを与えるのだ。トン  
カチを打つ音と同じリズムで頭痛はするし、  
ネジを埋め込む機械の音が響くたびに、キュー  
ウと全身にさしこみを起こした。近所の工  
事でもこんな反応をするのだから、家をやら  
れたら、発狂するかもしれない”“私の自己  
嫌悪は、日々激しくなった。寝たきりになっ  
ていた私は、工事の場所が移動するたびに、  
一番音のしない部屋へ、寝場所を転々とする  
計画になった”等と説明している。

テンプル・グランディン(1988)は、音に対  
する体験の強烈さについて、“突然大きな音  
がすると、今でも私は飛び上がってしまいま  
す。ほかの人よりも強烈に反応してしまうか  
らです。私はいまでも風船が嫌いです。いつ  
風船が割れて驚かされるのか、予測がつか  
ないからです。ドライバーや風呂場の通気口  
のファンなどの高音の雑音が持続するモー  
ター音は、今でも耐え難く感じます。低音のモ  
ーターではそうでもありません。母、私の先生  
や家庭教師は、一点だけを除けば私にとても  
良くしてくれました。それは私の感覚の問題

には気づいてくれなかったことです。もしそのことに気づいてくれていたら、かんしゃくやほかの問題行動は大幅に軽減していたと思います。家庭教師は、私が大きな音が苦手だということに気づくと、悪いことをしたときに耳元で紙袋を破裂させるというやり方で私を罰しました。これは拷問でした。子どもにとってとってもつらく苦しい感覚刺激を、決して罰として使うべきではありません。突発的に大きな音をたてるものすべてに、私は怯えていました”“雑音は私にとっては大問題でした。大きな音やざわざわした音をうまく聞き流せず、すべての音に耳を塞いで引きこもるか、音のすべてを貨物列車のコンテナみたいに封じ込めるしかなかったのです。そうした音の猛攻撃を避けるために、自分の中に引きこもって世界を遮断していました。大人になった今でも、耳から入る刺激をうまく調整することができません。空港で電話する時に騒音を取り除いて電話の声だけ聞けることができません。騒音を聞かないようにすると電話の声も聞こえないのです。普通の人は騒がしい場所でも電話を使えますが、私にはできません。聴力そのものは正常です。子どもの時はクラッカーが破裂したりレコードが鳴り響く「雑音発生器」がいったいの騒がしい誕生パーティーに耐えることができませんでした”等と述べている。

これらを踏まえ、トニー・アトウッド(1999)は、“自閉症やアスペルガー症候群の人による報告や臨床的な観察から、ひどく強烈に感じられる雑音には三つのタイプがあるようです。一つめは、突然、不意に生じる音で、ある成人のアスペルガー症候群の人が「鋭い」(シャープ)と表現した音です。例えば、犬の吠え声、電話のベル、咳、ボールペンのカシャカシャする音、などです。二つめは、台所、風呂場、庭などの家電製品に使用されている小型のモーターに特有の持続する高音です。三つめは、ショッピングセンターや騒

々しい会合などの沢山の音が複雑に交じり合った混沌とした音です。これらの感覚刺激は、親や教師にとっては、それほどひどく不快な音というわけではないので、これを耐え難いと感じる彼らに共感することは難しいかもしれません。しかし、彼らがどのように感じているかは、身近な例で言えば、私たちの多くが不快に思う学校の黒板を爪で引っ掻くときのような特定の音であろうと推測されます。こうした雑音を想像しただけで身震いしてしまう人は、特にめずらしくありません”等とコメントし、聴覚の過敏を克服するために、“例えば、掃除機の音が子どもにとって強烈すぎるのであれば、その子が学校へ行っている間に掃除機を使えばよいのです。別の子どもの例を挙げましょう。その子の行動を観察しているうちに、椅子が教室の床をこする音に耐えられないことがわかりました。その音は、それぞれの椅子の脚先にフェルトカバーを付けることで回避できました。それでようやく学校での勉強への集中力が向上したのです。聴覚刺激のレベルを下げるための防御となるもの、例えば我慢できない音が聞こえてきたらすぐに使えるように、ポケットにシリコンゴム製の耳栓を用意しておくといいでしょう”“大切なことは、親や教師が聴覚の感受性を十分に認識して、突発的に生じる騒音のレベルを最小限にしたり、回りの人のがやがやした話し声を抑え、子どもにとって耐え難く強烈だとわかっている特定の音を避けることです。そうすることで、彼らの不安レベルを低下させ、集中力や社会性を向上させることができます”“音が耐え難い時、その音が出る理由とその持続時間を説明できれば、役に立つでしょう”“聴覚統合訓練と呼ばれる新しい技法もあります。これは、フランスのギー・ベラールによって開発された治療で、特別に調整された音楽を十時間聴く方法です”等とアドバイスしている。

さて、耳栓の効果については、ニキ・リン

コ(2004)も、“耳栓をしていた方が、音の角が取れて聞こえます。それと耳栓をしているといいのは、外の音をシャットアウトする分、自分の身体の音が聞こえることです。たとえば、つばを飲み込む音とか自分が歩いている音とか”等と述べているし、苦手な音や嫌いな音について、“私が『怖い』と感じるのは、顔に照りがある人とか、キンキン声の人みたいなんです。その声が、どうやら音質的に怖かったらしいんです。母は情熱的な人でした。その情熱で、私を守ってくれたところもいっぱいあったと思うんです。でも、情熱的な人って、声の高低が激しいですよ。それが怖かったです”“スピーカーだって音量を上げすぎれば音が割れて、歌詞は聞こえにくくなるでしょう？それに、びっくりするのに忙しくて、内容を聞き取る余力が残りません。あと、私の場合は、聴覚と痛覚の混線だと思んですが、ある種の甲高い音や声があると、額の左側がピリッと感電みたいになってたんです。おかげで、メガネが見つかった、お菓子がおいしい、と母が大声を出すたび、痛くて手でかばっていました。母は体罰反対派だし、どうしてもってときもお尻だったはずなのに、私はまだ、額の左を手でかばう癖があります”“叱るときって甲高い声をあげますよね。でも、何かなくした物を探していて、見つかったときとかも、「あった！よかった！」とか甲高い声をあげるでしょう？私はその声に込められた感情を区別することができませんでした。あと、犬をかわいがっていても、声は高くなりますよね。そういうときにも、「叱られた！」と脅えていました。顔の表情が読み取れないのと同じように、声の表情が読み取れなかったので、甲高い声＝叱られた人＝私は悪い人、と解釈していたのだと思います。本当に叱られても、個々の行為が悪かったとは気づきませんしね”等と説明している。また、感覚のオーバーフローについて、

“私たちの耳は、音を全部平板に拾います。おそらく定型発達の人には、たとえば話している相手の声とかを優先的に拾うことができているのだと思います。オートマチックで。でも自閉スペクトラムの人の耳は、今こうやってもお二人の声や、外を車が走る音や、エアコン音やパソコンの音など、全部同じように拾ってしまいます。だから、感覚を受け止めきれなくなってしまう”“歩き方はわからなくなりますね。疲れたり、強い刺激を受けたりすると”等と説明しています。

一方、ピーター・サットマリ(2005)は、激しい雷雨の音を聞くときつろいだ気持ちになることができるアスペルガー症候群の例を紹介し、“ジャスティンは常々、クリーニング店かドライクリーニング工場で働きたいと望んでいました。洗濯機や乾燥機の立てる音が、彼にとっては純粋な喜びなのです。何年か前、彼はそのような店に職を得たことがあったのですが、音に夢中になるあまり、すべき仕事に集中することができず、結局首になったのです。ジャスティンは常に音を愛し続けてきました。二十五年ほど前に彼がはじめて診察を受けたときでさえ、すでに彼のカルテには聴覚刺激に対してどれほど関心が高いかが具体的に書かれていました。今もし彼に尋ねれば、確かに物音をいつも興味深く感じてきたこと一音を聞くと漠然と嬉しく楽しい気持ちになることを認めるでしょう。音を聞くと、彼はくつろいだ気持ちになれるのでしょう。

「音の中には、僕を守ってくれるもの、僕らの精神安定剤になってくれるものもあるんですよ」と彼は言います”“ピアノを弾くのはかなり上手ですが、プロ級というほどではありません。しかし歌声は素晴らしく、普段の会話の中で認められるような一風変わったイントネーションは微塵もなく、驚くほどです。彼は物真似の名人です。高校の恩師の物真似など完璧といえるほどで、特に洗濯機の仕組みについて授業で教えているときの先生の物

真似がお得意です。彼がこの話を語るときは、くすくす笑って実に楽しそうです” “ジャスティンが特に虜になっているのは激しい雷です。雷雨のたびにテープレコーダーをそとに持ち出し、その音を録音します。後でそれを聞いて楽しんだり、眠るためにそのテープを流すのです。私はかつて、どうして雷雨の音を録音するのか、彼に尋ねたことがありました。「どれもこれもみんな同じだろうに、そうだろう？」ジャスティンは、まるでこの世にこれほど愚かな人間がいるのかと言わんばかりの目で私を見ました。「違いますよ。すべてまったく違ってしています」そう言ったものの、それ以上詳しいことは言いませんでした。私は彼に、次回の予約の際にテープを何本か持ってきてくれるよう頼み、その時間、一緒にそれらを聞いてみました。彼の言うとおりでした。実際、嵐はすべて違う音だったので。彼は雷鳴にはさまざまな違いがあることを指摘しました。音量に違いがあることはもちろんでしたが、私はそれまで音の高さやリズムがこれほど違うことに一度も気づかなかったのです。何という驚きでしょう！ジャスティンには、私が自然に聞き取れないことを聞く能力もあります。微妙な知覚の違いに対するこのような注意力には、確かに驚かせます。しかし、もっと一般的な意味で極めて目を引くのは、細部の複雑さがアスペルガー症候群の人々にもたらす喜びです。アスペルガー症候群の子どもたちは、健常な子どもたちが音楽を楽しむよりも遥かに音を愛する傾向があります。彼らの注意を引きつけ、つかんだまま放さないのは、純粋な音の感覚、リズムと高さです。言葉はほとんど興味のないものです。歌詞で伝えられる感情に対してとんだ見当違いの解釈をしていることもあります。自閉症の子どもに歌の意味を尋ねても、歌詞をそっくり繰り返す以外、ほとんど何の返事も得られないことがしばしばです。ドラムを叩くのがとても好きで、屋根に落ちる雨

音を真似て、いろいろな大きな箱を何時間もガレージで叩いていたアスペルガー症候群の少年もいました” 等と報告し、“知覚的な世界をとらえる能力は、ジャスティンやクリスに限らず、私たちの誰にでも本来備わっています。自閉症の人の場合、この障害の神経病理によってこのような知覚的生活が解放された、おそらく拡大されたのではないかと思えます。一方私たちの場合、この能力は抑制されています。言語と隠喩と社会的な慣習という鎖につながれているのです。それでも折りにふれ、その世界を覗き、人間の発達の謎めいた偏りを認識することは不可能ではないのです” 等と述べている。

#### 4. 感覚過敏をふまえた上での特別支援教育の重要性

さて、アスペルガー症候群の子どもや大人たちが感覚過敏（味覚過敏、聴覚過敏など）について語っている声に耳を澄ますことによって、教師たちが配慮しなり工夫しなければならない点が明確になってくると思われる。そこで、まず最初に、味覚過敏に対する対応について考えてみることにしよう。

例えば、学級崩壊になった4年生の学級を引き継いだ宮島恵子(2001)は、好き嫌いが激しい自閉傾向を持つA児が学級崩壊の誘因になっていることに注目し、“4年生の時、担任の先生は、泣いているA君を見て、訳も聞かずに一方的に私を怒った。先生に腹が立ったが、泣いているA君にも無性に腹が立った。それから、A君が泣くとよけいに責めてしまう” “私たちだって嫌いな物を我慢して食べているのに、A君はずっとこうなんだ。ずるい！” 等と攻撃をエスカレートしていく子どもたちに対して、<嫌いなものを食べてみよう>と努力した時の気持ちや、どうしたら食べられるようになったかをA君に話してあげたら>と提案し、A君への対応については、<先

生はまだA君がどんな物が食べられないか分からないので、これからA君と相談しながら給食を食べたいのだけど」と、担任の意向を伝えて、クラスメートの同意を得ようとしている。

そして、その後は、4つの基本的なかかわり方（①一対一の面接を通してA君の話をじっくり聴く。コミュニケーションの体験を増やす。②行動パターンを変える時には、かならず理由を説明し時間に余裕を持つ。出来ると信じ待つ→出来たら必ず賞賛する→できた行動を他の児童や保護者に知らせる。③A児の行動について、わがままや自己中心的な行動ではないことを学級の児童に知らせ、理解を得るように働きかける。いじめを防止する。④A児をパニック状態にさせないようにする。他の児童にストレスを与えない。学級全員の学習権の確保。担任がA児に関わる時には、他の教師に協力を依頼すること）を考え、実践している。

宮島先生のこのような学級運営に関して、滝川一廣(2001)は、“A君への関わりは、給食指導からはじまっています。「偏食」の問題です。ペットを飼うとわかりますように、動物は一般にとっても「偏食」でしょう。笹しか食べない動物もいますよね。口にあわないもの、嫌いなものは断固として食べません。それに比べると人間は実にあらゆるものを食べます。それだけ食いしん坊なのかもしれませんね。しかし、こんなにいろいろなものを食べるのだから、なかにはひとつやふたつ食べたくないものがあったとしても生命に別状はありません。それが「偏食」として問題になるのはなぜでしょうか”等と、問題提起し、“なぜ、まずいものまでわざわざ食べなければいけないのか、A君には符に落ちないのです。それに加えて、偏食を叱られる、攻撃されるという体験とセットになってしまえば実際にはかえって偏食からの脱却は困難になります。食卓が楽しい安心の場でなくなってしまうため

です。ただでさえ口に合わないものが、ますます不味くなってしまいますから”“宮島先生がなさったのは、食べられる範囲を少しずつという行動療法的な手法を取り入れつつ、無理に全部を食べねばいけないわけではないという安心を与え、机を並べておしゃべりしながらの食卓にしたり、食べた努力をほめたり（嫌なことを自力でなしとげたことへの誇りを与えたわけです）、A君の食卓を楽しいものとする工夫でした”“宮島先生がなさったことは、子どもの間の問題をできるだけ「倫理化」しないで、つまり、善悪の問題としないで扱ってゆくということでした”“どうしたら嫌いなものでも食べられるようになるか、という問題の立て方をします。問題を倫理化せず、現実的実践的な課題に置きなおして、それをA君や他の児童たちと共有していたということですね”等と解説している。

次に、聴覚過敏への対応について考えてみることにしよう。

例えば、ルークジャクソン(2005)は、学校について、“ぼくも、小学校のときって大変だった。もう、なにからなにまでトラブルだらけでさ。いじめでしょ、聴覚過敏でしょ（どうしてあんな、耳がおかしくなるほど大きな音で鐘を鳴らさなきゃいけないんだろうね？それも毎日、数えきれないほどの回数だよ！ぼくには永久にわからない謎だね）”等と述べ、“この本を読んでいるみなさんの中に、学校の先生、アシスタントの先生、専門家の人とかはいませんか？もしいたら、お願いですから、どうか、どうか、わかってほしいんです”と訴えている。

一方、高橋沙都(2008)は、学校について、“学校に近づいてきたら、火事みたいにボウボウになってきて、学校は火事になってうわ〜っと燃えてるねん、火事になったらそこから逃げたくなるやろ、そんな感じ。そのままおったら自分は燃やされて燃えかすになってしまう、家に帰るまでは火が消えへんねん”

“教室も休み時間もうわ〜っとなってる、給食もうわ〜っとなっていて、食べられへんねん”  
 “夜の公園で遊ぶのが一番好きやねん。誰もいてないからうわ〜っとなれへんし静かやもん”  
 “学校とか家の前におったら、遊ぼっ、遊ぼって言われるやろ〜。うわ〜っとなるねん”  
 “おばあさんになったらゆっくりできるわ。だって早くこれやりなさい、あれやりなさいって言われへんし、遊ぼ、遊ぼも言われんですむからゆっくりできるやん。うわ〜っとなれへんやん”等と述べている。

これに関して、母親の高橋尚美(2008)は、“学校では、一日中無秩序な音や動きの嵐で、予測のつかないことも多く、まるで地雷原をさまよっているような感じだったのかもしれない。「おばあちゃんになったらゆっくりできる・・・」という言葉は、わずか八歳の娘が日々の生活をこんな風に感じて、しんどい思いをしていたと思うと、とてもショックでした”と感想を述べ、“娘は、集団生活でつらかったことや感じていたことを、具体的に話してくれるようになりました。・教室での先生や大勢の子どもの話し声や動き、校舎や体育館での声、足音などの反響音。・授業中、子どもたちが「ハイッ、ハイッ」と大きな声で、パラパラ手を挙げている様子。・給食の時間の「いただきます」と一斉に言う声。木のお箸より金属のスプーンで食べる日の方がつらい(スプーンが食器に当たる、カチャカチャという金属的な音質や音量)。・席替え。慣れていた場所から違う場所に移るので、落ち着かない、見え方も違う。・一対一ならなんとか遊べるけれど、それ以上になるとつらい。複数に話しかけられると困る。一対一でも相手が大きな声を出したり、激しい動きをするとつらい。静かな場所で一人で休けいしないとクタクタになってしまう。・階段の上り下りは、怖いのでゆっくり下りていると、後ろから押されて怖かった。・一生懸命にがんばっているのに先生からは「早くしなさい、

早くしなさい」「もっとがんばりなさい」、クラスの子どもからは「早くしろ、早くしろ」とばかり言われていたこと。…推測しかできなかった娘の世界を、本人の話から知ることができたのは、娘に合った支援を考える道標となりました”と補足している。そして、学校の対応の変化について、“私は、娘が無理なく過ごせる環境を考えてきました。学校の中も少しずつ変わり、特別支援教育も始まったこともあり、全体で共通認識をもって支援する方向に変わってきました。そして、診断がついてからは、以前よりも理解していただけるようになり、私と一緒にいろいろな対応を考えてくださっています。登校する時は、休み時間の喧騒を避けて短時間だけ行きました。保健室を居場所にしたこともありました。学習支援が必要な子どもたちが勉強している三人ほどの教室で過ごしてみたいこともありましたが、でも、一つの教室の中で複数のマンツーマンの授業の声や、上の教室からの音も娘の聴覚にはつらいものでした。校舎の中では静かな環境が保てないので、別棟の会議室も検討していただきました。それでも娘には、安心して学習できる場所ではないようです。娘は学校に行くと、パワーがなくなると言います。他の子どもたちには何気ないこと、例えば、ふいに声をかけられたり、校庭のすぐ横を通過する電車の音も、娘にはうわわオバケがいっぱい出ているのです”と訴えている。

また、東田直樹(2005)も、「ぼくらのして欲しいこと」について、“あります。僕はして欲しいことがたくさんあります。とにかく、違いを理解してくれると嬉しいと思います。ついている体の部分は同じですが、機能がかなり違います。言われているのが分からないように見えていても、分かっていると信じてやって欲しいのです。分かっていると信じてくれるだけで、苦しい気持ちは半分になり、生きる意欲が生まれてきます。自分がある時、知らない国に連れて行かれたとして、言葉も

分からない、誰も自分のことを理解してくれないとした時、あなたはどうしますか。笑われて怒られて嬉しいことが少しもなかったら、きっといつも泣いているでしょう。みんなは分からないでしょうが、僕がおかれているのはそういう状況です。様子が分からない僕たちを助けてください。助けてくれれば僕たちだってやっていけるのです。僕たちに分かるように話してください。ゆっくりと短い文で、絵や字でかいてくれるともっと分かりやすいです。目を見て話すことを強制しないでください。すごく緊張して、ますます話せなくなります。僕たちが変なことをしても笑わないでください。とても傷ついて何もしたくなくなります。時々ひとりになれる居場所をつくってください。みんなの中にと、とても疲れるのです。僕たちもみんなと一緒にだと信じて、同じように話してください。みんなの仲間に入りたいのです”等と訴えている。

それ故、アスペルガー症候群の子どもたちのこのような声に耳を澄まし、学校で生じている様々な音（教室のドアの開閉時の大きな音、机や椅子を持ち上げて運ぶ時の引きずる音、時間を知らせるチャイムの音、廊下に響き渡る子どもたちの声、子どもを叱る教師の声、耐震工事の大きな音、運動会の音楽、講堂での音楽発表会の音、避難訓練の時のサイレン、等）について考慮し、音に関する過ごしやすい環境を整備し提供することも大切であると思われる。

## 文献

- Barron, J. and Barron, S (1992) : There's a Boy in Here. New York : Simon and Schuster.
- 藤家寛子(2007) : 自閉っ子は、早期診断がお好き。花風社。
- Grandin, T. (1998) : 'Teaching tips from a recovered autistic'. Focus on Autistic Behaviour 3, 1-8.

東田直樹(2005) : この地球に住んでいる僕の仲間たちへ—12歳の僕が知っている自閉の世界。エスコアール出版部。

泉流星(2005) : 僕の妻はエイリアン—「高機能自閉症」との不思議な結婚生活—。花風社。

ルーク・ジャクソン(2005) : 青年期のアスペルガー症候群へ。ニキ・リンコ訳、スペクトラム出版社。

ケネス・ホール(2001) : ぼくのアスペルガー症候群。野坂悦子訳、東京書籍。

宮島恵子(2001) : 自閉傾向を持つ児童へのかかわり—荒れた学級を引き継いで学級担任としてしたこと—。教育臨床事例研究5。愛知教育大学教育実践総合センター、39-49。

ニキ・リンコ、藤家寛子(2004) : 自閉っ子、こういう風にできてます！。花風社。

奥平綾子(2006) : 自閉症の息子 ダダくんの11の不思議。小学館。

高橋沙都・高橋尚美(2008) : うわわ手帳と私のアスペルガー症候群—10歳の少女が綴る感性豊かな世界—。クリエイツかもがわ。

滝川一廣(2001) : 宮島論文「自閉傾向を持つ児童へのかかわり」へのコメント。教育臨床事例研究5。愛知教育大学教育実践総合センター、50-55。

トニー・アトウッド(1999) : ガイドブック アスペルガー症候群—親と専門家のために—。富田真紀・内山登紀夫訳、東京書籍。

リアン・ホリデー・ウイリー(2002) : アスペルガーの人生。ニキ・リンコ訳、東京書籍。

## <付記>

本論文は、平成21年の夏に、愛知教育大学で行われた公開講座「教育臨床セミナー」で行われた講演に加筆訂正を加えたものである。